

ティーチング・ポートフォリオ(教育業績ファイル)

教員氏名	酒井 健太郎
主な担当科目	音楽芸術運営基礎演習, 音楽芸術運営特別演習②, 音楽情報論, 基礎ゼミ, 芸術運営ゼミ①(大学研究生), 芸術運営ゼミ②(大学研究生), 図書・図書館史, 卒業研究, 博士特別運営研究③, 博士論文演習③
2025年の教育目標・授業に臨む姿勢	・学修内容をこちらから押し付けて学ばせるのではなく、履修者に関心をもってもらい、学修に対する積極性や主体性を引き出すことを心がける。 ・履修者を「落とす」ための授業にはしない。そのために、第一に授業の進め方、特に履修者にしてもらわないとならないことをきちんと説明する。必要に応じて繰り返し説明して理解してもらう。そこで躓かせないようにする。第二に、履修者の状況に応じた授業内容にする。そのために必要な準備の時間を十分にとる。 ・ゼミ科目においては、学生の論文執筆を丁寧に支援する。成果物(論文等)の体裁を整えることに傾注するのではなく、学生に最大限に考えさせ、それを文章化させる。そのためには学生の思考力と文章力を高める必要がある。また、学生自身が持っている能力を引き出して利用するようにしたい。
2025年の教育に関する自己評価	・履修者の関心をもってもらうために、できるだけ学生に身近な問題を設定し、参考資料としてメディア・コンテンツを多く用いるなどの工夫をした。 ・出席・成績不良者には個別に対応するなど、学生の状況に合わせた指導をすることで、履修者をできるだけ落とさないようにした。 ・ゼミ科目では、よい研究をするための指導をおこなった。 ・まず、研究計画には大きな枠組みを構想する(問題の所在を把握する)俯瞰的アプローチと、小さな事象について観察して記述を積み重ねる(具体的な研究をおこなう)微視的なアプローチの両者が必要である。どちらも蔑ろにせず、自覚的に両アプローチをとれるよう指導した。 ・次に、よい論文を書くためには、情報(データ)の収集、収集した情報(データ)の分析、分析した結果にもとづく考察が必要で、それらを理論的に記述する力が必要である。これらに関わる総合力を高めるよう留意しながら指導した。 ・論文はとにかく自分で考えて自分で書かせた。単に文章を添削して、表面的な修正の指示をするのではなく、文章は、ことばの含意や言い回し、暗黙の前提によって、ニュアンスが変化することを解説し、日本語力の向上をめざした。
2025年のFD活動に関する自己評価	参加した研修会については積極的に取り組んだ。音楽教養分科会FD研修会では、分科会主査として司会・進行を担った。実技担当の非常勤の先生にできる多くご発言いただき、また疑問点などがある場合には、それを伺い、分かる範囲でお答えするようにした。 FD研修会の年間テーマや研修内容についての募集に対して、検討・提案した(2025年2月3日)。
授業改善のために取り入れた研修内容	昨年の本欄にも書いたのだが、本学における学生の学修のベースラインをどこに設定するか――健康で意欲的な学生は、能力を伸ばすことを学修の目的と設定できるが、体調がすぐれない学生はまずは登校することをベースの目標と設定せざるを得ない――は大きな問題である。教員は多様で、個々の考えにもとづいて教育活動をしており、それはそれでよいので、ここで統一的なやり方を設定する必要があるということではない。しかし、学生によって多様なベースラインの設定の仕方があるということは共有しておくべきではないだろうか。そうしたことをFD研修会で述べるようにした。それはむしろ私自身の授業の改善にも関係していることである。さらにいえば、多様な学生がいる以上、授業に不変の理想形ではなく、常にベターをめざして「授業改善」をおこなうのが、われわれの仕事であろう。

2025 年度(春学期)「学生による授業アンケート」結果に対する授業改善計画書

教員コード:1851 教員名:酒井 健太郎

1)アンケート結果に対する所見

今回、該当する科目は 2 科目である。それぞれについて述べる。

「音楽芸術運営基礎演習」(3025)

スコアだけ見れば、ほとんど 100 点満点である(満点でないのは Q4 の出席状況を把握しているか問う設問のみ)。専攻の主科に関わる少人数の科目で、高スコアになりやすい状況であると言える。

「ピアノ教養特論Ⅰ」(1109)

こちらも全般に高スコアである。平均スコアを下回ったのは Q6「わかりやすくするための工夫」と Q7「授業時間外の学修」の 2 設問であった。オムニバス授業はスコアが上がりにくいように感じているが、この科目はそれにしては良好と言えるのではないかな。

2)要望への対応・改善方策

「音楽芸術運営基礎演習」(3025)は、特に要望は表されなかったが、学生の修士論文の成否に繋がる科目であり、できる限り高レベルの授業をめざして、不断に見直す。

「ピアノ教養特論Ⅰ」(1109)は自由記述に「授業の質にばらつきがあった」と書かれた。私の担当回が低かった可能性を考えて、こちらも不断に見直す。

3)今後の課題

大学の授業は、ある一定の水準の知っていること／考えることができることを学生に求めるべきであろうか。それとも、学生の現状をより高めることを考えるべきであろうか。学生の現状をより高めていくことの繰り返しにより、学生がある一定の水準(さらにそれ以上)に到達することが理想的であり、实际的でもであろう。毎回の授業できちんと積み重ねていかないとならない。この点に留意して授業を担当したい。

以 上

2025 年度(秋学期)「学生による授業アンケート」結果に対する授業改善計画書

教員コード:1851 教員名:酒井 健太郎

1)アンケート結果に対する所見

- 「卒業研究 音楽教養(大)」(100226)…全般に高(好)スコアである。ただし回答率が 22.2%と低調である。
- 「ピアノ教養特論Ⅱ(大)」(100268)…こちらも全般に高スコアである。回答率は 23.7%とこちらも低調である。
- 「音楽情報論(大)」(100414)…スコアが平均以下の設問が 3(Q1・2・4)、平均とほぼ同値が 3(Q3・6・7)、平均以上が 3(Q5・8・10)である。回答率は 44.9%。
- 「図書・図書館史(大・短)」(104177)…全般に高スコアである。回答率は 44.4%。
- 「音楽教養演習Ⅰ」(105343)…全般に低調である。回答率は 65.5%。

2)要望への対応・改善方策

- 「音楽情報論(大)」(100414)…スコアが平均以下の設問、Q1 については、授業初回にシラバスを見せて説明しているので、あとは、各自よくシラバスを確認するようにと履修者に呼びかけるくらいか。Q2 に関して、授業内容・展開はおおよそシラバス通りだと私は考えているのだが、「あまり思わない」と評価した学生(1 名)はどの点を以てそう評価しているのか知りたいところである。Q4 は履修者に、出席状況を各自把握するようにと呼びかける。自由記述で、詳しく知りたいところについてもっと時間を割いてほしいという要望があった。より詳しく知りたいトピックがあったら、毎回の授業で書いてもらっているコメントに書いてもらうよう、呼びかける。
- 「音楽教養演習Ⅰ」(105343)…イレギュラーな時限に実施する科目である。必ずしも全履修者が満足できる時限に授業をおこなえるわけではなく、どうしてもその点についての要望が多くなる。履修者に授業予定をこれまで以上に早めに伝える、他の教員に本科目について知ってもらうよう情報提供する等の工夫を担当の先生方に呼びかけたい。
- 「卒業研究 音楽教養(大)」(100226)、「図書・図書館史(大・短)」(104177)、「ピアノ教養特論Ⅱ(大)」(100268)…特段の要望はない。「卒業研究 音楽教養(大)」は、自由記述に「3 年生くらいからやりたかった」という声があったが、これについては 3 年生(以上)対象の演習科目との接続性に配慮した科目の組み立てをするとよいかもしれない。

3)今後の課題

- 「音楽情報論(大)」(100414)…履修者の積極性を引き出すことが課題であろう。工夫しているつもりではあるのだが…。
- 「音楽教養演習Ⅰ」(105343)…科目の運用の仕方で改善できるところについては、運用を担当されている先生と相談していきたい。

以 上